を強化していく必要がある。

4．「労働者・心の健康相談」の経験から（II）一社 一例の検討
福島労災病院内科
○高橋 宏明 下川 一志 織名 淳一 遠藤 坂田 由美 桃生 寛和

電話という相談形態は相談者側の自由度が高く、利用しやすいというメリットが考えられるが、同時にその限界を踏まえた対応を行わねばデメリットもありうる。そのため、対応者の基本姿勢は聴取、支持による心理的サポートであり、医療機関に子様パス用であると考える。しかし、複数回相談が寄せられる事例においても電話相談への依存が高まり、問題解決の妨げになってしまうことある。このような事例では相談に参加する相談者、心理療法的アプローチが有効であると考え、事例を通じて検討を行った。事例：女性、摂食障害に伴う不眠、および職場でのいじめを主訴。年齢不明、過去に境界性人格障害、自殺企図にて精神科入院歴あり。現在、心療内科通院中で医師により入院を勧められているが、恐怖心から断念している。初回治療、不安、自殺念慮の訴えが頻繁に続く。電話での依存心、入院の必要性への気づきが見られたところで、電話の頻度、時間枠等を契約。入院を前提とした心理療法的アプローチに切り替えた。

5．一般市民病院における、手術不能肺癌の真実の病状説明可能群と不可能群の心理的因子の相違点の検討
市立総合水沢病院内科
○坂倉高太郎 毛利 孝 鈴木 順 市井 聡子 鈴木 敏教 西村 思夫 石井 元 座原 仲之

対象・方法：手術不能肺癌患者57例（男性44例、女性13例、平均年齢66.0±10.7歳）に、適性調査により実際の相談形態をアンケート、MASまたはSTAI、SDS、YGテストを施行した。希望に沿って心理療法の配慮をしながら真実の病状説明を試みた。真実を説明できた群（以下A群）と、できなかった群（以下B群）があった。両群の心理的因子の相違点について検討した。

結果・考察：A群24例（男性18例、女性6例）、B群33例（男性26例、女性7例）、平均年齢はA群63.9±10.7歳とB群70.1±10.0歳で有意にA群が若かった。A群：1）病状説明希望アンケートにしっかり自分の意思を述べ、心理テストに回答できる例が多かった。2）不安状態や抑うつ傾向が明らかに少なかった。3）YG性格テストでは、ほとんどの者が安定した性格を示しており、B群：1）老人性病倒や、重症例、高齢者が多く、意図表示の力がある、そして真実の病状説明を希望しない例であった。2）心理テストに回答不能例が多く、実を説明できずそれぞれに応じた対応が必要であった。

6．抑うつ状態の1例における安静時唾液pH初期変化量（ΔpH）の検討
岩手医科大学第三内科1 同院学術口診生理2
○三上 一治1 佐藤 薫2 鈴木 順1 星野 健1 井上 洋西2

症例：26歳、女性。1999年8月5日、食欲不振、体重減少、易疲労感、脱力感、不眠、動悸、立ちくらみ、嘔気を主訴に来院した。1995年より某歯科診療所に在籍し歯科工士として勤務したが仕事が忙しく、家宅近くからは食事の支度をしなければいけくなり、これがとれなくなった状態が続いた。1999年1月より上記症状が出現、某県立中央病院消化器内科を受診、検査するも異常所見はなく、内科紹介となった。薬物療法、精神療法ならびに咀嚼習慣改善のアドバイスを行い、諸症状は消失し、良好な経過で現在に至るが、興味深いことは、実際には安静時唾液pH初期変化量（ΔpH）は治療当初、著しく低値であったが病状の改善とともに著明な増加を認めた。

7．3交代勤務従事者の夜勤適応度を規定する要因
東北大学第二内科学1 東北労災病院循環器科2
○平黒 武志1 宗那 正徳2 福土 寛1

目的：3交代勤務に従事する看護婦の夜勤適応度を規定する心理行動学・生理学的要因を検討すること。

方法：看護婦226名に対し、血液検査、血圧測定、身体測定を実施し、自己記入式質問票を配布して勤務時の状態、ライフスタイル、心理行動特性、年齢を調査、勤務時の状態を従属変数、他の変数を説明変数とする重回帰分析（ステップワイズ法）行った。

結果：“深夜勤務時の活力状態”を低くする主たる要因は、うつ状態の高さ、年齢の高さ、赤球数の少さであった。また“深夜勤務の自己適応度”を低くする主たる要因は、特性不安の高さ、趣味のなさ、身体不適の多さであった。

結論：個人の心理・行動特性やライフスタイルが、夜勤適応度と関連することが示唆された。